

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）

県政の課題（テーマ）報告書

令和 2年 11月 16日

山梨県知事 殿

氏 名 成島 未彩
留 学 先 イギリス
オックスフォードブルックス大学
留学期間 令和元年 9月 5日
～令和 2年 4月 21日

1 研究の課題（テーマ）

グローバル人材育成のための英語教育

2 概要

与えられた県政の課題の解決に導く考え方及び対策等

私はグローバル人材育成のための英語教育法を確立するために、二つの目標を掲げてきた。一つ目として自分自身がグローバル人材になること、二つ目としてグローバル人材育成や英語教育の充実の基礎となる、楽しく分かりやすい英語の授業を確立することである。

一つ目の目標はオックスフォードブルックス大学（以下 OBU）での生活を通して達成することができたと考える。OBUには世界 140 か国からの留学生が集まり、その占める割合は 2 割にも及んでいる。国際化の進んだ大学であるため留学生を対象とした活動が多く、それらに積極的に参加することで、様々な国の学生と交友関係を築くことができた。大学で行われるグローバルバディーズという留学生と現地学生が交流することのできるコミュニティでは、週に一度パブやスキットル、クイズ大会等のイベントが催され、そのたびに世界中の留学生と交流を深め、新しい発見を得ることができた。留学生の多くは第二言語として英語を習得していたため、母語が異なるという理由で本来であれば意思疎通が難しかったであろう人とも、コミュニケーションを取ることができた。その度に、意思疎通をすることができなかつたであろう人との交流を可能にし得る英語という存在の重要性を痛感した。そして、その可能性を将来に繋げることの重要性を強く感じた。また、彼らとの交流を通して、日本での常識が世界での非常識であるなど、これまでの人生で形成されてきた概念がいくつも覆され、柔軟な思考や多様なあり方を容認できるようになった。

また、現地の授業を受講することで忍耐力を得ることができた。この力も、不慣れな場で実力を発揮するためにグローバル人材として身に付けておくべき能力の一つと言えよう。授業では、現地学生でも辞書を引きながら読む文献を予習として毎回課された。それらを理解することが授業参加の大前提であったため、受講を拒まれているように感じ諦めてしまいそうになった時もあった。しかし、この労力こそがグローバル人材への近道だと信じ、何事にも忍耐強く取りくんだ。結果として、今後どんな状況に立ったとしても、努力が成功への近道だと学んだ。それらの経験から、忍耐強く物事と向き合える自信を得ることができた。

このような経験とイギリスでの生活を通して、自分が日々確実にグローバル人材としての道を歩んでいると感じた。

二つ目の目標である英語教育については、全ての授業を英語で受講し英語を効果的に習得することができた経験を踏まえ、自分自身が英語の運用を楽しんで行うことのできる授業づくりと英語の授業を英語で行うことの意義を習得した。しかし、英語教員の英語力不足は英語教育の問題の一つとなっているのが現状である。高度な専門性が重要となってくる高校教員であっても、半数以上がTOEIC730点以上を取得していない県が存在しているのが現状である。幸い山梨県は70%という結果で平均を上回るものの、85%を占めるトップと比較するとその差は歴然である。山梨県の中学校にいたっては、TOEIC730点に達しているのはわずか20%だ。それ以前の問題として、TOEIC730点という基準が適切であるかを問わなければいけない。TOEIC700~800点のレベルイメージとしては、「短文も長文も比較的聞き取ることができるが、英語での要点の裏付けや話の展開範囲は限定的」とTOEICによって述べられている。教壇に立つ教員の英語力は生徒に大きな影響を及ぼすため、このままの状態では建設的なグローバル人材の育成は見込めない。その懸念を払拭するためにALTを活用する各地方公共団体が年々増加しており、その数は5年で2倍の1万3千人にも及んだ。しかし、それは根本的な問題解決とは言えない。英語教員には、一定の英語力が求められ、文部省が定める学習指導要領では中学高校ともに「授業は英語で行うことを基本とする」と明記してあるものの、授業で英語を概ね使っていると答えた教員は中学では20%、高校では僅か7%であった。私自身留学時には、授業開始当初は授業についていくのに必死で教授の簡単な指示さえ追えてないことがあったが、数週間経つと自然と教授の話が頭に入ってくるようになり、質はもとより量の重要性を身をもって感じた経験から、できるだけ多く長く英語に触れる環境を提供することの重要性を主張していきたいと考える。

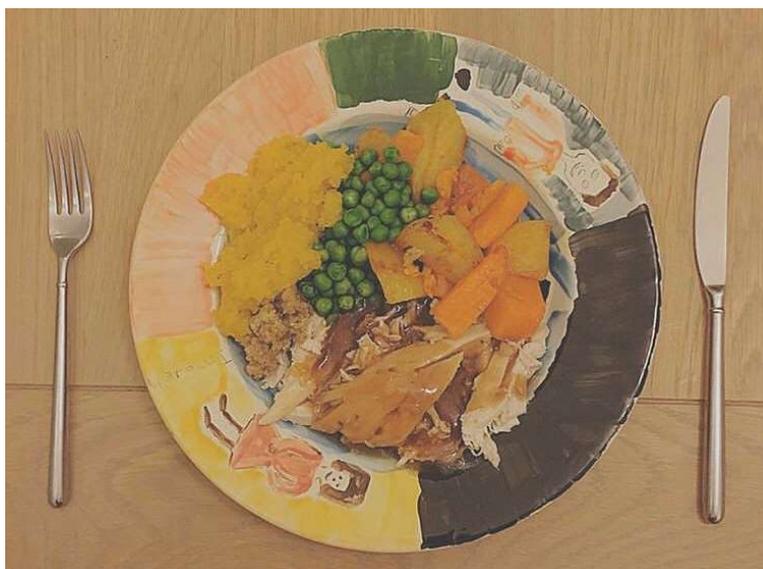
しかし、教師が英語でただ授業を行うだけでは質の保証が危うい。なんといっても、英語学習の最大の武器は生徒の動機である。しかし、英語を学ぶことが当然とされ、同様にその教育制度により英語を学習してきた私達に、英語を学習する意義を問われても生徒の動機に良い影響を与えられるような答えを述べるのは難しいかもしれない。しかし、私は留学を通して英語を学ぶことの最大のメリットを体感し、その素晴らしさを伝えるための授業法を学ぶことができた。効果的な授業法については、授業において学生の関心を維持するために効果的な指導法を教育学の授業にて学んだ。そのうちの一つに、教師の授業方法が挙げられる。教師は、学生が興味を惹くような問題提示の仕方や話し方、身振り手振りなどで、授業に参加させる必要がある。単純なことではあるが、ただ単調かつ一方的に話すのではなく、重要なポイントは声を張ったり間を有効的に使ったりし、注目を集めることで授業に取り込むという方法だ。そのような点に留意した授業が現地では初等教育から実際に行われているため、プレゼンテーションや模擬授業では、現地学生のパフォーマンス力は圧倒的に高く、高評価を得ていた。実際に、プレゼンテーション評価項目の一つに、声のトーンを調節したり、ボディランゲージを効果的に用いたりし、聴衆の関心を得られているかという項目があり、話し手のパフォーマンス力がいかに重要視されているかが分かった。授業も一種のパフォーマンスであるという考え方を学び、特に第二外国語としての英語教育には、学生を授業に取り込み学習意欲を維持させるために効果的な考え方であると感じた。日本の英語教育においても、一方的な教えではなく、生徒主体のアクティブラーニングが導入されているが、それでも生徒の動機を維持することは容易ではなく、45分の授業で集中力を切らしてしまう生徒がいる。生徒に限らず、私達も単調なプレゼンテーションは途中で違うことに意識が向いてしまうのと同じである。エンターテイナーとして、楽しい学習を提供する術を学んだ今、実践を通して自分の教授法を確立していきたいと考える。

以上より、自分はグローバル人材育成のために、一つ目にオックスフォードブルックス大学での生活を通して自身がグローバル人材になること、二つ目にグローバル人材育成や英語教育の充実の基礎となる、楽しく分かりやすい英語の授業を確立するという目標を達成できたことを報告する。

3 添付書類



食事の時間が重なると
インド人のフラットメイト
がおすそわけをくれる。
この日はチャパティとカレー
を頂いた。
私は唐揚げを、
と思うが宗教の関係で
おすそけ
できないことが多かった。

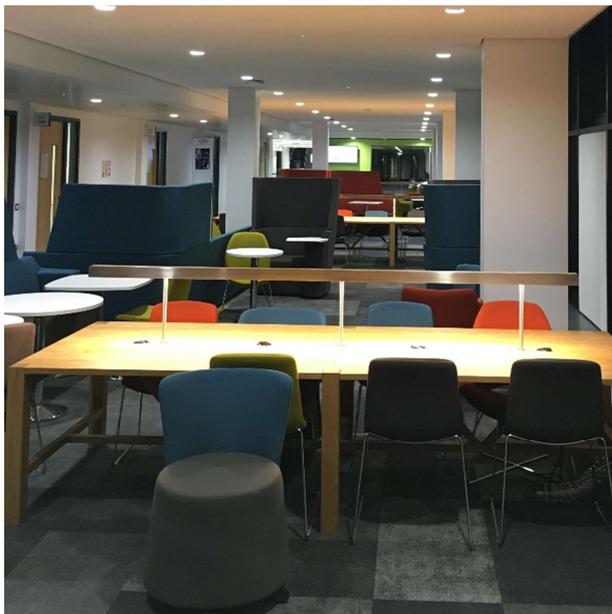


イギリスのサンデーロースト
だと言ってフラットメイトが
ふるまってくれた。
ローストチキンに
グレイビーソース、野菜、
マッシュポテト、
グリーンピース。



運河の旅へ出かけた。

産業革命前後に大量輸送手段として造られた運河が、今ではレジャー用として活用されているようだ。



大学内の学習スペース

図書館以外にも学べるスペースがたくさんあり、学習環境が整っている。くつろいで勉強できる空間が多い。



フラットメイトと餃子を作った。

その後帰省した際に家族と餃子を作ったようで、その様子を動画で見せてくれ嬉しかった。

食文化交流の楽しさを学んだ。



習字の筆の書きにくさに皆苦戦していた。

墨の独特の匂いを好む人もいた。



浴衣を友人らに着せた。
皆初めて着る人ばかりで、
とても喜んでくれた。
着物との違いや、着付け方などを
教えることを通して、日本文化を
伝えることができた。
友人らからも、各国の伝統衣装に
ついて学び異文化交流を深めた。